日本大學農獸醫學部校友會報

発行所
日本大学農獣医学部
校友会
編集発行者
会報発行委員会
印刷所
東京商工KK

新校舎第二期工事すすむ
来年三月末に竣工予定

一昨年、本館第一期工事が竣功して、その偉容を下馬の高台にそびえ立たせたが、引きつづいて本館の第二期工事が、本年八月二十一日に松井建設の手によって着工され、明年三月末に竣功予定で現在工事がすすんでいる。

新築校舎設計の内容を紹介すると

○建坪 二〇九坪二合二勺
延坪 一、〇九四坪
○総工費約一億五百万円
○建築 松井建設株式会社
○設備 第一設備株式会社
○電気 三和電気工業株式会社
○各階の平面図
地下 実験室二、研究室三、特別実験室二、醤油製造室一
地上一階 実験室二、研究室六 特別実験室一、宿直室一、便所一
二階 教室五、便所一
三階 図書館分館、標本陳列室、便所
四階 実験室一、特別実験室六 研究室一、総合研究室

これらをまとめて各室別にわけると次のようになる

○実験室五(各二七坪余)
○特別実験室十一(各九坪余) この中には、ドラフト室、天秤室一、エーテル室一を含む。
○研究室十一(各九坪余)
○アイソトープ利用を含む総合研究室(六十余坪)
○教室五(三六坪余一、他は二七坪余)
○図書館分館(学生閲覧室六七坪余、書庫二七坪余、事務室十余坪で従来のものより相当広い)
○標本陳列室一(五四坪余で現在の二倍以上広い)
○醤油製造室(八二坪)
○暗室 一
○宿直室 一
○便所 三

右の内容によってもわかるとおり、教室、実験室の増加と、図書館および標本室の整理拡充などに重点をおいたこと、ならびにアイソトープ利用の総合研究室を新設して放射能の実験研究に多大の成果を期したことなどが注目される。

農芸化学科の歩み
今後の施設拡充を望む

農学部創立以来の懸案であった農芸化学科の独立も、今年度より増設されて、第一回の入学生を迎えた。従来の農産製造学専攻は、今年度からは募集しないこととなり現在は二学年以上が同専攻の学生として在学している。

この様に形式的には二本立てとなっているが、次の教授陣容と共に実質的には両者は一体で農芸化学科として発足している。

農芸化学科では、就任を予定されている教授陣容の内、今年度は生物化学担当の主任教授、農博、森高次郎教授、農産製造学担当の農博、西川英次郎教授、生物化学実験化学実験担当の白井助教授を迎えて学科充実の基礎を固めているが、研究室と教授は次の如くである。

一、土壌肥料学研究室—農博、大村牧教授。農博、岩田武司教授(未就任)
二、生物化学研究室—農博、森高次郎教授。
三、栄養・食品化学研究室—農博、中島關二教授。
四、農産化学研究室—農博、西村貫治教授(未就任)
五、農産製造学研究室—農博西川英次郎教授。

学生は、さきの如く定員四十名の難関を突破して入学した第一学年生のみであるが、何れも独立学科の第一回生としての自覚と希望に燃えた優秀な学徒である。この学生の担任は、従来農産製造学専攻の主任として、農芸化学科の増設の為に少なからざる努力を傾けられた中島關二教授で学生の研指導と併せて人格の陶冶に日夜努力されておられる。

農芸化学科では現在第一の目標を社会の要求に十分応え得る有能な人材を養成することに置いている。言うは易く行うは難いことである。これが対策として、研究室では、毎月数回に亘り全員が科内会議を開き、学生の実験実習に就て真けんに討議を行っている。近い将来にその具体的な方針が打ち出されることと思う。優秀な学生を養成する為には、教員の研究は多少犠牲となっても止むを得ないと言うのがその方針であるから、やがて面目を一新する日も遠くないことであろう。

従来の農産製造学専攻の学生は二、三、四の三つの学年であるが、昭和三十六年に現在の第二学年が卒業すれば、以後は、農芸化学科一本となるわけである。農芸化学科の独立にともなって就任された教授、助教授は、農産製造学専攻の講義を目下担当されて居り、又研究設備も次第に充実しつつ有るので、これらの学生は従来より一段と充実した講義、実験を履習しているわけである。

然しながら、すべてが満足すべき状態とは言い難い。今年は校舎増築中であり、教授研究室も一室に圧縮されて、実験室を唯一の研究の場とする農芸化学科としては非常な不都合を感しているが、これ又現状では止むを得ないことと思われる。然しながら新館落成の暁には、これらの悪条件もやがて自然に解決されることと思われる。

学部祭開催について

涼風と共に待望の秋が訪れて参りました。校友諸兄には益々御健勝の事と御推察致します。さて恒例の学部祭を十一月一日より三日間 校内に於て開催致します。今年は新築工事のため運動場の使用が出来ず、仮装行列、馬術演技等の行事が出来ません。しかし、学内展示に集中力をしぼり左記の如く実施致します。先輩諸兄の観覧を願い、御指導、御批判をいただきたく願っております。

十一月一日(土)
大講堂に於て生物慰霊祭
学術展示一般公開、文化行事
十一月二日(日)
学術展示一般公開、文化行事
十一月三日(月)
学術展示一般公開、文化行事

次に各学科の展示内容を紹介致します。

獣医学科 一号館、1234番教室
一、精液について
一、繁殖障害の疾病(卵巣、黏液検査を含む)
一、乳房炎に関すること、予防と治療について
一、研究内容の写真展示
一、薬品、器具、器械の展示
一、フイラリヤについて
一、牛乳の製造から販売……牛乳検査
一、採集器の展示
一、ホルモン検査

農学科 一、二号館、5 6 10 11 12番教室
一、醤油醸造中の微生物の動態について
一、醤油の味について
一、砂糖の製法
一、実習製品の即売(味噌、沢庵その他)
一、香辛料の化学
一、生活とビタミン
一、化成肥料の展示
一、パンのエンリッチ
一、バラ展
一、バラ即売会
一、バラの病虫害
一、お茶の見本展示

農業経済科 一号館・7、8、大学院教室
一、他校招待ゼミナール 農産物流通機構の合理化について
一、土地改良の経済的効果
一、養鶏における共同化問題
一、肉豚の流通機構
一、経営部門の機械化

林学科 一号館13、14、15番教室
一、森林の治水能力
一、有名林業地紹介
一、合板、パルプ展示
一、苗木販売
一、立体地図

畜産学科四号館23、24、25番教室
一、パノラマ
一、各家畜写真展示
一、畜及び生産物の品評会
一、経済
一、生産物販売

水産学科本館四階生27、28、29番教室
一、パノラマによる水産市場
一、水産業写真展示
一、養殖
一、漁業
一、製造
一、浮遊生物学教室(プランクトン)

農学科の歩み

昭和二十二年十一月、農芸化学科が新設され、農学科内農産製造専攻が廃止されて、農学科は純農学系の学科として新発足する事となりました。

一昨年農芸化学科設立の気運が高まるに伴い、農学科も単独学科の体制を進め、昨年六月に永井教授が農学科主任教授となられ、以来農学科内に学年別にクラス担任を置き、学生生活の指導、監督をし学生の勉学・統一・親睦を計って参りました。

昭和三十三年四月に新たに二名の教授を招聘する事が出来ました農業土木界のパイオニアとして活躍しておられる、元茨城大学学長、現東大名誉教授である田中貞次教授が農業土木学の講座を担当され、又蔬菜で有名な、農林省園芸技術研究所蔬菜科長江口庸雄氏を教授としてお迎えし、現在蔬菜園芸学、果樹園芸学を担当されて居ります。

永井主任教授の下、任任新任の教授陣営に新たに清原孫導任講師が助教授となり、各教授の下に研究に学生指導に万全を期して居ります。

先ず教養科目の重要性に鑑み必須科目の増加をはかり又専門科目の修得には年次見学即ち一年次八丈島亜熱帯地方、二年次、高冷地農業地帯、三年次静岡県一団園芸地帯、四年次北海道地方の見学の外東京附近、各地の研究機関等の見学・実習を併せ履習し、学即業の実践を行って居る。更に校友諸兄の援助の多い農学演習は従来の方式を変えて、各教授の専門に分れて逐次一年間行い、専門教育の最後の仕上として活発に行っている。

本年度の学生の傾向は活発な発表力と旺盛な研究心の向上が特に目立っており、学生間の協力が顕著になって来た。この傾向は学生の好学心の向上と科内融和の精神の現れと思われる。

学生の活動は学友会活動とは別に科内の親睦のためにレクリエーション大会を開き映画にスポーツに一同楽しい一時を過す事が出来た。又学園生活の記録をシリーズ映画に納め第一作 八丈島見聞記は天然色トーキーで完成し第二作製に移って居ります。

監修 佐藤春夫 大仏次郎 久松潜一 西田直二郎 西岡虎之助

全十八巻 現代人の日本史

主なる執筆者
佐藤春夫 丹羽文雄 室生犀星 松本清張 海音寺潮五郎 今東光 中山義秀 南条範夫 尾崎士郎 榊山潤 立野信之 中谷孝雄

呈内容見本
東京都千代田区神田小川町3—8 河出書房新社 電東京(29)3721 振替東京 10802

昭和三十三年度校友会役員

役名	氏名
会長	工藤正城
副会長	白井恒三郎
副会長	白山巖
理事	山本秀雄
〃	上野勲
〃	蒲原務
〃	小関滝
〃	金田禎之
〃	設楽茂雄
〃	桑原志都夫
〃	白井恒三郎
〃	福島正次
〃	白山巖
〃	田島貞次郎
〃	野崎邦興
〃	来米速水
〃	佐藤弘一
〃	三木敏夫
〃	河村光幹
〃	杉原要
〃	宮崎善三
〃	東禎三
〃	加瀬恒夫
〃	納賀栄之
〃	工藤正城
〃	北川休
〃	福田秀夫
常任委員	工藤正城
	白山巖
	桑原志都雄
	佐藤弘一
	山本秀雄

農学校友会便り

恒例の大学祭も間近に迫り、学生の動きも活発になって参りました。

事務局の窓から増築工事の鉄柱が雨に霞んで何本も立って居るのを見ますと、大学も大きく発展したものだと感じ、同時に校友会も年を経て来たなと沁々と感じられます。

顧ますれば、昭和二十八年の夏に同窓会設立発起人会が開かれ、第一回総会、懇親会開催以来五回の総回を或いは江の島で或いは玉川で開催して参り、その間同窓会が農学校友会と改名して、本年にて創立五周年を迎える運びとなりました。

この五年間常に歩む事の出来たのは一重に校友諸兄の深い理解と固い団結の力があったればこそと事務局一同は感謝致して居ります。

昭和二十年、現在の新校舎が竣工致しました時に農獣医学部校友会より各科校友会に応分の寄附をしたらと云う声が掛りましたが、本校友会の寄附及会員の寄附口数は他より非常に多く、独自に大時計を寄贈し新館玄関に掛け、移りゆく時を学生に教職員に告げて居ります。

又昨年度農芸化学科新設に伴い農学科は耕農業一本の学科として発足する事となりました。その時に農学校友会は大学当局に農学科の教務師拡充強化、実験設備の増強等を要望致しましたが、本年四月、田中貞次、江口庸雄の両教授が農学科に入りました。

農学校友会は常に母校の発展と農学科の繁栄に心を一つにして尽してゆき度いと考えて居ります。

本年は創立五周年になりますので、本年度の総会、懇親会は盛大に行う予定になって居り、昨日の幹事会に於て、総会は大学にて行い、懇親会は記念祝賀会として赤坂の弥生亭にて行う事と決定致しました。

之を契機として又一大発展を遂げ校友諸兄のより一層の親睦をはかり度いと念じて居ります。末尾ではありますが新役員氏名を御伝え致します。

会長　一期　山本　秀雄
副会長　二期　矢島野太郎
理事　一期　蒲原　務
〃　四期　玉木　且三
〃　五期　上野　勲
〃　六期　石黒　忠久
〃　七期　宮浦　徳麿
幹事　一期　山本　秀雄
　　　　　　渡辺　工
　　　二期　矢島野太郎
　　　　　　八巻　喜己
　　　三期　守谷　道夫
　　　　　　山本　信一
　　　四期　玉木　且三
　　　　　　西鳥羽　鐐
　　　五期　上野　勲
　　　　　　本庄庄太郎
　　　六期　石黒　忠久
　　　　　　千地　明
　　　七期　石川　和夫
　　　　　　宮浦　徳麿
　　　八期　小嶋　仁一
　　　　　　二見　文男
　　　九期　大内　光
　　　　　　小川　勲
　　　十期　桃園宗三郎
　　　　　　菊地　久善
　　　十一期　白岩　隆己
　　　　　　市川　滋平
　　　十二期　大久保　宏
　　　　　　鈴木　正蔵
評議員　三期　齋野　元
　　　四期　西鳥羽　鐐
　　　五期　梅沢　一三
　　　七期　山本　春夫
　　　八期　田代　明彦
　　　九期　大内　光
　　　十期　鈴木　弘保

いもづる会だより

◎会の動向

秋風がそぞろ身に沁む候校友諸兄には益々御健勝にて御活躍の事と存じます。

当いもづる会も皆様のお力によって一層隆盛の歩を続けております。本紙面をもって会の動向をお知らせ致します。

五月二十三日

昭和三十三年度第一回幹事会開催-日本大学本部会議室に幹事十数名が集り次の議題について討議した。

1、昭和三十二年度会計決算承認
2、昭和三十三年度予算案審議
3、昭和三十三年度定時総会開催に関する件
4、根岸教授還暦記念論文集出版計画に関する件。

六月二十八日

昭和三十三年度定時総会及び懇親会開催

1、会長あいさつ。
2、前年度決算報告-全会一致承認。
3、本年度予算案審議-五月二十三日の幹事会で審議決定した予算案に若干の修正が加えられ成立
4、根岸教授還暦記念論文集出版事業実施に関する件-全会一致承認、続いて懇親会に移る。懇親会は、下高井戸「よろづや」に於て、大学当局及び農獣医学部並びに各科校友会幹部の御臨席の下に会員との懇親会が盛大裡に行われた。

◎根岸教授還暦記念論文集出版計画

根岸教授が間もなく還暦を迎える事になりました。ついては、当いもづる会が主体となって、岩田横川両教授の時と同様、御祝として記念論文集を出版する計画を幹事会で樹立し、六月の定時総会において承認を得たので、目下、出版時期を昭和三十五年一月を目標に事務局で具体案を作成中であります。具体案が出来次第校友諸兄の御協力を求めることになりますから、よろしく御願い致します。

◎吉報

前回会報でお知らせして以降、三木徹夫前会長他次の諸兄が華燭の典を挙げられた。ここに紙面をおかりして校友一同謹んで御祝い申し上げます。

角井　信(旧姓□□)(四期埼玉県庁農政課)越智学(七期東京文化短大)、田中長生(七期東京青果)、青山和夫(八期神奈川県農業会議)根方　勤(一〇期岩手県農業)

◎就職のお知らせとお願い

昭和三十三年三月の卒業生、二十三名の就職が次の通り決定致しましたからお知らせ致します。

県庁一名、農協関係三名、教育関係二名、会社関係四名、青果市場二名、自営四名、大学院四名、不明四名という状態であります。

なお来春三月卒業予定者三〇名の殆んどが就職を希望し、本人は勿論、大学当局、諸先生方の御尽力によりボツボツ決定をみておりますが、相変らずの就職難でありこの打開は校友諸兄の御力添なしでは不可能と思います。校友の中で何かよい話しがありましたら、農業経済学研究室まで御連絡下さるようお願い申上げます。

(高橋記)

桜水会だより

一、桜水会は水産学科創設十周年を祝し記念事業を計画、さきに二十万円を水産学科実習船建造資金の一部として大学当局に寄附、その他記念事業に賛同を得た寄附金(約十万)で図書購入等を計画実施中である。

一、日本大学水産学会々長教授石川昌博士は今回水産動物解剖を編著せられた。尚同教授は本書の発刊に当り之を日本大学水産学会に委託されたので直ちに学会役員が協議の上一致日本大学水産学会が本書を発行する事とし御協力させて戴くところとなった。またここに当り桜水会も本書を各水産系大学及び主な試験研究所に頒布する等の計画を立てている。

一、教授猪谷明雄博士は来春三月をもって目出度く還暦を迎えられる。これに当りさきに猪谷教授還暦記念事業会を新関製木講師を中心に着々準備が進められ目下御記念会に御賛同の通知が連日届いている。締切日は十一月二十日であるが同博士の還暦を御祝しまた博士の多年の御功績を記念し頒恩の微意を表するための本会がますます発展を祈っている。

一、水産学科の講師として特に講義に学生の人気を集められていた関根博士は今度東京水産大学学長に就任せられた。後任は高知講師である。また水産学科海洋学講座担当の宇田道隆博士は去る八月カナダ及びアメリカに水産海洋学御指導のためおもむかれた。帰国は明年八月の予定。尚後任は海洋化学御専門の森田博士である。

一、来春の卒業予定者は約七十人であるが、就職状況は相変らず低調である。やはり先輩諸兄からのニュースは待どうしい。御協力をお願いする。

各科　校友会の動き

獣医学科便り

昭和三十三年三月の卒業生は五月下旬に二、三の者を除き全員就職したがこれ等卒業生の就職の大半は地方官公庁に課長又は係長として奉職して居る校友の尽力によるもので、獣医学科教官と獣医学校友会と校友会支部との緊密な連絡の賜物と思って居る。

昨年迄は学会其の他で獣医学科の地方出張を利用し地方の県庁其他との連絡に当って居たが今年から獣医学科校友会から獣医学科々内教官会議に提案し就職の開拓及び地方校友会支部との緊密な連絡を計る為学会其の他を利用すると共に獣医学科の教官から毎年二名を派遣する事を定めその為の旅費等を獣医学校友会及び獣医学科の旅費を付てする事となりその第一年として、今夏の獣医学会の為新潟に出張の小野教授が長野新潟の両県全国大学家畜病院長会議の為岐阜滋賀三重愛知、静岡の各県を歴訪し、大熊助教授が北海道旅行を利用し北海道、青森、岩手、宮城、山形、秋田、福島の各県を、八月下旬相模に於ける講演会に出張栗原教授が富山、石川の両県を訪問し各県庁関係、共済連等関係方面に挨拶すると共に就職に関し依頼を行った結果明年三月卒業予定者に対する予約申込を受けた県もありその効果の大なるものを認めた。

又校友会支部に於ても歓迎会を開催せられ各地共多数の校友参加し農獣医学部の隆盛を心から喜ぶと共に今後益々地方支部と中央との連絡を密にし積極的に新卒業生の就職に協力すると共に各日大校友会の地方支部との緊密化に努力を約束せられ多大の収穫を挙げ得たと思われる。

今年は近畿以東を歴訪したが来年度は近畿以西の地方に対し行う予定になって居る。

又病理学担当の利守一教授は八月一日羽田空港を出発、米国のフイラデルフィアのペンシルバニヤ大学に於て開催せられた国際獣医学会に出席、日本獣医学会を代表して講演を行い、幾多の収穫を得られ且つ米国獣医学会並びに獣医教育を行っている各地の大学等を視察し、日本の獣医教育を説明し種々の意見交換を行いたる後、空路大西洋を渡り英国、仏国、独乙瑞西、伊太利の各地を歴訪せられ獣医関係機関の視察を行われ特に独乙に於ては日本人で恐らく近時訪ねた人のない地方に迄足を運ばれ、幾多の貴重なる資料を集めて九月下旬に帰校せられた。恐らく近くその詳細については同教授から報告せられる事と思うのでここで述べる事は止めて置きます。

現在建築中の第三号校舎が完成すればその一部に獣医学科関係の研究室の一部も移る事となると思うが、その中でも特に総合研究所の中に入るアイソトープ研究室は医学部、歯学部の研究室と共に日本アイソトープ学会に大きな力を加え得る設備が行われるであろうと期待して居ますが、今日迄日本獣医学界に対し唯一つのアイソトープ研究を行って居る学校として学界より多大の期待を持たれて居るだけに研究室の完成が更に獣医学界に偉大な貢献をなし得るものと確信すると共にその完成を待望する次第です。

獣医学科のある全日本十三校の内博士課程の大学院を有する三大学の内、唯一つの私学の大学に於て他の何れもが行って居ない研究を行うと共にその施設に於ても最優秀の研究室の完成も半歳の後に控え、日本大学農獣医学部の充実を示すことの出来ることは我々の最大の喜びであり、次々と各学科が充実せられる事により農獣医学部が全大学の内容も充実せるものとなる事も遠くないと思うがこの為にこそ学校当局及び各学科の緊密な連繋、協力援助によるものと考える。

学内人事動異

森　高次郎(農化)
西川英次郎(〃)
江口　庸雄(農学)
教授に任命する
四月一日(各通)
田中　貞次(農学)
教授を嘱託する
四月一日
臼井　和雄(農化)
助教授に任命する
四月一日
助教授　細谷　英夫(獣医)
同　福島　正次(〃)
教授に任命する(各通)
四月一八日

農芸化学・紫友会

待望の農芸化学科は数倍の志願者より選抜された約六十名の優秀なる一年生(内女子五名)を迎え、教授陣も四教授、一助教授、三講師の錚々たるスタッフにて記念すべき第一歩をふみ出しました。厳格に教育し、実力ある学生として世に送り出し、百%就職達成という方針の下に早くも厳しい勉強が始っていますが来年専門課程に進むとともにいよいよ本格的な軌道にのるという次第です。校友諸兄もどうぞ優秀なる志願者をどしどし御推せん下さい。

農芸製造、農芸化学の同窓会である紫友会も今春会員数三三一名とさえ益々発展の一途をたどっていますが本年度総会は去る七月十四日虎ノ門共済会館にて開かれ、昨年度の会計報告及新年度の予算案が満場一致で承認されました。続いて懇親会が農芸化学の発展を祝って盛大に開かれ、学校側より岩田学部長、石坂事務長、中島、大村、中島、臼井の諸先生方が臨席され、他に佐藤、白田、矢島、若林の各科校友会代表が出席されました。本会側から小関、金田、数沼正副会長以下会員約一〇名が参集しました。席上岩田部長より農芸化学科の新課程とこれからの進むべき道について話があり、次で新任教員の紹介がありました。すなわち森教授(生物化学)西川教授(農産製造学)臼井助教授の三先生のうち森、西川両先生は所用で欠席され臼井先生が挨拶された。同先生は昭和二三年東北大理学部化学科卒、東大応用化学助手を経て今春本学助教授に就任された方で専門は脂溶性ビタミン。またアイソトープ技術にも御造詣が深い新進気鋭の若先生であります。

さて今春卒業した一八名の就職状況は雪印(鎌田)ミヨシ油脂(八幡)日本ビタミン(山城)保証牛乳(大谷)出雲ゴム(桐ケ谷)北陽研(山口)光研樹脂(福沢)東之浜農業研究所(岡田)茅崎市役所(日比)教員(佐久間、酒井)自営(石川、島田)といったところであります。この他成毛清明君は東京移民団の一人として十月四日ブラジルへ出発しました。同君は田畑関係の仕事につく予定です。

来春の就職は不況下のことで意外に厳しく、味の素、共同飼料日清化工などの求人申込の他、専門関係の会社の受験就職に教職員、学生一体となって努力していますが校友諸兄の一層の御援助をお願い致しておきます。

なお農芸化学設備により将来の就職状況は極めて有利になってきたことは事実で大いに喜ぶべきことであり格段の御期待にそえると思います。(石井)

林学科校友会近況

林学科校友会は、昨年来、会長西野忠(第一期)副会長、上野貞昭(第一期)副会長、宮崎善三(第一期)理事会長、杉原要(第三期)に改選され、以来、相変らず活発に仕事をしている。

校友会報を出すこともすでに二十一回、在校の現会員諸君とも、つねに提携しつつ、林学科をたてに強く結んでいる。

一昨年は在校生のために、スキーを五揃え購入したが、昨年度においては、テントを三組寄贈した。校友はつねに、後輩を愛して、後に続く者のために考えている。

昨年の卒業生の中、谷崎進君はブラジルに出た。今年十一月四日の船で、第一期の中村茂君と来春卒業する山根俊宏君が一緒にブラジルへ行く。林学科の中には、更に多くの者が海外発展を考えている。ということは、日本の林学界のために悲しむべきことであるがブラジルの林業のためには、大いに慶賀にたえないことだ。呵々。

又、長いこと、庁に勤め、校友会の理事会長として、後輩をふるった杉原要君は、此度伊豆大島支庁に転勤される。数年、島のよい空気を吸って来いというわけである。

決して島流しではない。その証拠には電話一つかければ、飛行機で数十分で帰宅することも出来る。

さて北海道から鹿児島の端まで分散している会校友には、殆んど毎月に校友会報で連絡しているが地区別の分会がないので、もうそろそろ、北海道分会、九州分会、四国分会、東北分会、関東分会、中部分会、中国分会、近畿分会等が出来てもよいと考え、その案も出している。

本部事務局で、がっちりと総元を締めているから、会員名簿も毎年十一月一日現在で更新され、会員に発送される。こんなに一生懸命やっている事務局はますないだろう。とうぬぼれている。

さて、これでもう、七期生まで出たが、こうなると、もう一期、二期の中には、相当な地位についている者もあり、後続部隊を送ってくれと、うれしいことを言って下さる。

誠に、林学科の創世期に乏しい設備で、貧しい勉学をしなければならなかった先輩は、めぐまれた今の在校生諸君の生活を想像出来ないであろうが、これにしても、やはり、乏しい中で、奮闘した先輩の方がよく勉強したように見えますね。

官界に出ている者、林業試験場林野庁、営林署、県庁の林務課での他、また国策パルプや小林林業所、大昭和製紙、東北パルプ等々専門に学んだ道を生かして、各々貢献ある職場に仕事を楽しんでいる者もあれば、まだとんでもない専門外の仕事についているものもある。しかし住めば都で、専門外もで、結構たのしんでやっているしその中に生き甲斐を見出している者が多い。

学校の先生になっている者も少くないが、自分で大きな山林を経営している者もある。また製材工場をやっている者、材木屋の主人公も多い。

いかなる道に歩むとも、その中に真の生き甲斐を見出して、真剣に生きてくれれば、事務局当局のよろこび、これにすぐるものはない。当方も忙しいので、中々校友諸賢の思う通り動けないが、なにやかにやと御出し下されば、出来るだけ努力いたします。

校友諸兄よ、どうか、よきたよりをつねに送って、在校生を激励してくれたまえ。

そして、就職の件でも、つねに御尽力を願う次第です。

(事務局　加藤)